＜講演要旨＞

台湾・台北盆地の円山文化期の貝塚と遺跡

米 沢 容 一

はじめに

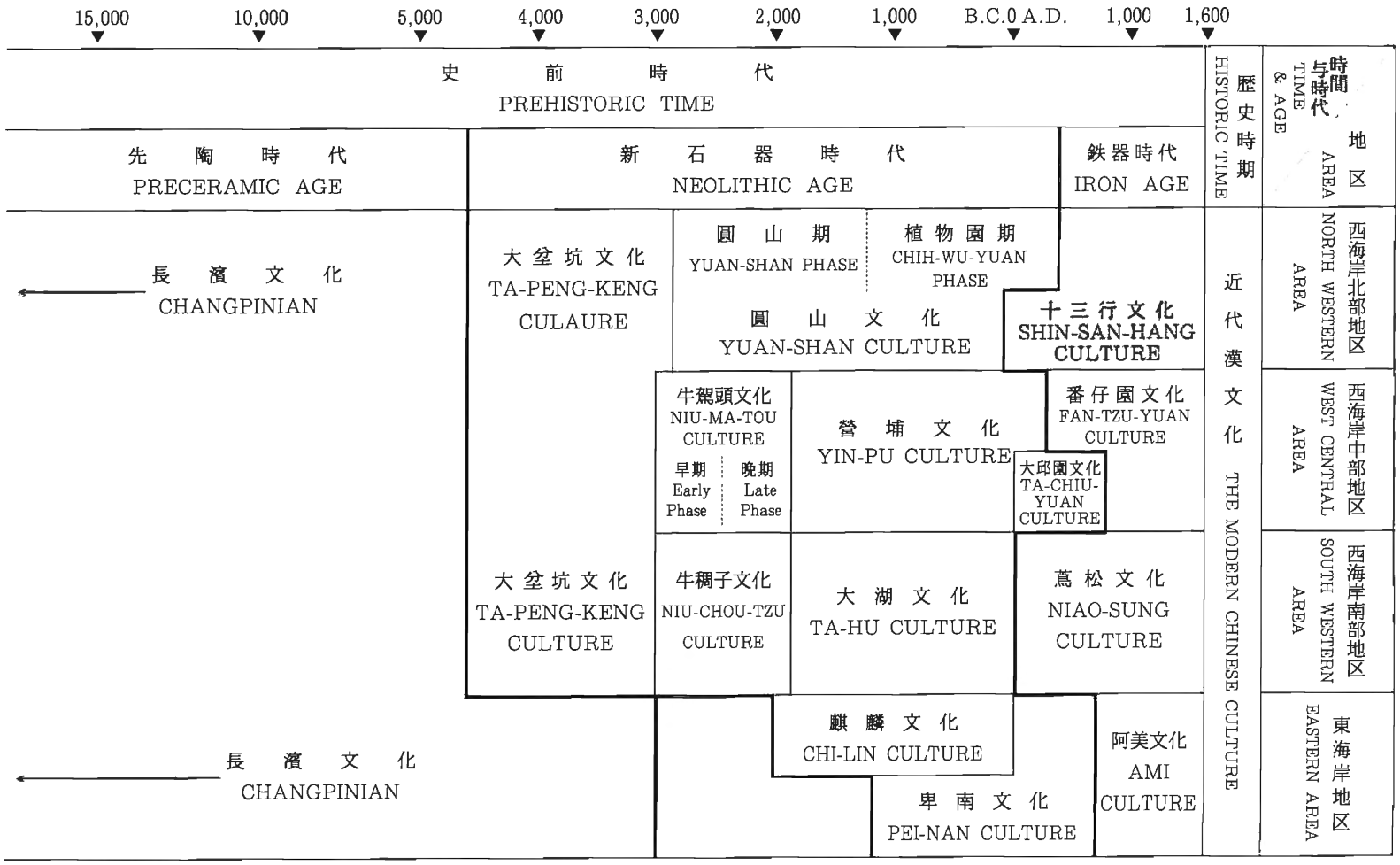
台湾の考古学研究はその初期段階では、円山貝塚を巡って展開されてきた（金関・国分；1950年）。その後、各地に数多くの遺跡が発見され、調査・研究が発展してきているが、円山貝塚の持つ重要性は少しも色あせたものとなっていない。むしろ、近年では円山貝塚の持つ重要性が再認識され、保存を前提とした現状確認調査が実施されている（連；1986年）。

著者自身何度か円山貝塚を訪れてみたが、周囲の環境の激変から昔日の面影を想像することは全くできなかった。地表面に散布している貝や遺物等の断片的な状況から往時の円山貝塚全体象を思い描いてみると、驚異的な質・量を考えることができた。円山貝塚以外の西新庄子貝塚・関渡貝塚等の存在した場所を訪れてみたが、筆者自身の探す努力が不足しており、全く所在する位置を確認することができなかった。現在の台北市の急激な変貌を考えれば、見つけることができないのは当然の事であるのかも知れない。円山貝塚がそのような急激な環境変化の中で、貝塚の主要部分が保存されていたことは幸であったと言えるのかもしれない。

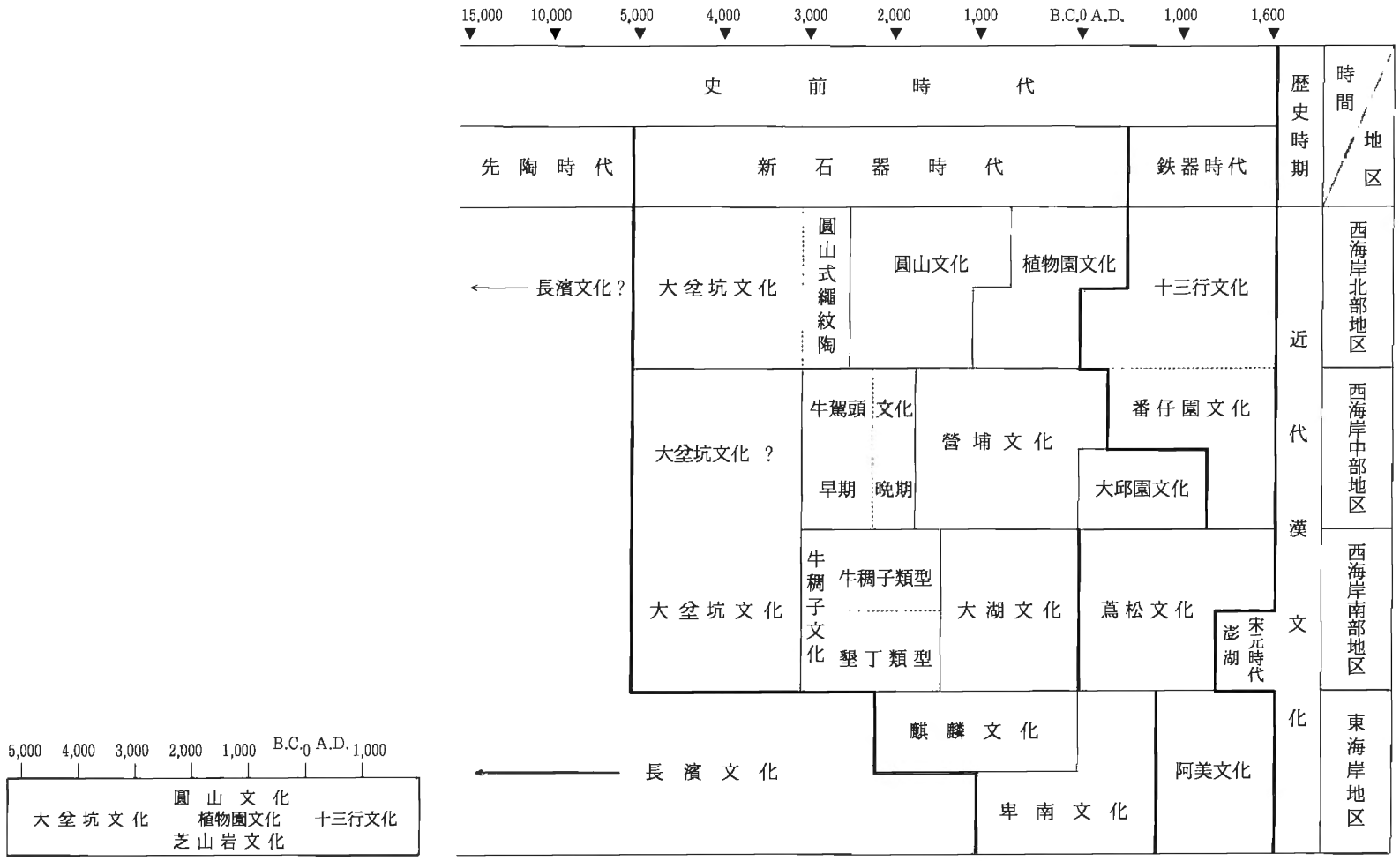
残念ながら、円山貝塚とその他の貝塚の現状を肌で実感し、相互を比較することはできなかった。円山貝塚・西新庄子貝塚とそれ以外の貝塚は、規模の大小を始めとして大きく様相が相違しており、北部台湾、特に台北盆地に分布する貝塚を考える上では重要な要素となる。

本稿で使用している円山文化期という名称は、正式に使用されたことの無い名称である。北部台湾の文化編年には幾つかの試論が示されているが、それらの文化編年試論の総てを包括するような極めて曖昧な時代区分を代表するものとして使用することとした。宋文薫は円山文化の中を円山期と植物園期という二時期に細分して把握している（宋；1980年）。黄士強と劉益昌は円山文化と植物園文化に分けて、各々を全く独立した文化であるとして把握した（黄・劉；1980年）。その後、黄士強は芝山巌遺跡の調査を契機として、円山文化・芝山巌文化・植物園文化という変遷を想定した（黄；1984年・1986年）。金子寿衛男は円山式期・芝山巌式期・西新庄子式期という仮称を与え、時期区分を想定している（金子；1978年）。どの様な時期区分・年代観を持って円山文化期と称するかは重要な問題であるが、本稿では仮に円山文化期という名称は北部台湾で貝塚の形成された新石器時代の総称として用いることとした。従って、先学諸氏の文化編年試論の総てを一括して円山文化期と仮称した。

円山文化と円山文化期との名称の混同を避けるためには北部貝塚文化期と仮称する方が良い



表－1　宋文薰・連照美の台湾文化編年



表－2　黄士強の北部台湾文化編年と黄士強・劉益昌の台湾文化編年

のかも知れないが、円山文化期の各文化が必ずしも貝塚に代表される文化ではないことを考えて、あえて円山文化期という名称を使用した。今後どの様な表現が適切であるのかを考え、名称と定義を明確にしたいと考える。

今回の論稿は既に報告されている資料を参照し、台北盆地内の円山文化期の貝塚と遺跡の分布を概観し、台北盆地内における円山貝塚・西新庄子貝塚を始めとする貝塚の持つ意味を検討し、問題を整理し、今後の研究課題を明確にしたい。

北部台湾の円山文化期を中心とした貝塚研究の概略

前述した通り、台湾の考古学はその初期段階は円山貝塚を巡って展開されてきたことが指摘されている（金関・国分；1950年）。金関と国分は同書の中で1897年に粟野博之助が円山で石器を拾得し、同年に伊能嘉矩（伊能；1897年）と宮村栄一が同地で貝塚を発見したとしている。鳥居龍蔵は円山貝塚の発見された1897年に台湾を訪れ、円山貝塚の調査を行い、報告している（鳥居；1987年a. b）。この中で鳥居は、その当時日本の学会の中で論争されていた人種論を持ち込み、円山貝塚を残した人類の系統について論及すると同時に、円山貝塚で出土している貝塚をシオフキであると報告している。佐藤伝蔵は円山貝塚で発見される貝種はオオシジミ・ハマグリであり、他の貝を検出することはできず、シオフキは見られないとした（佐藤；1901年）。鳥居は貝種に関しては後に殆どがタイワンオオシジミであり、他にはバイとカキを含むと訂正し、円山貝塚の発掘調査で出土した遺物から、貝塚の形成年代を推測できるとした（鳥居；1911年）。宮原敦は円山貝塚で巨大な砥石が出土したことを報告し、先史地理学的な観点から円山貝塚の形成年代を考察した（宮原；1919年）。金関丈夫・国分直一は宮原の考えた円山貝塚の形成年代に関して科学的な根拠が見られず、鳥居龍蔵の報告（鳥居；1911年）と1697年（康熙36年）『稗海紀遊』の記述を示し、宮原の年代観を疑問視した（金関・国分；1950年）。鳥居は円山貝塚の発掘調査の結果を踏まえて出土遺物の特徴等から大陸との関連を考慮し、淡水上流地区に居住した人類が石器時代から鉄器時代へ移り、最上層から明の磁器が出土していることを根拠として、同一の人類（＝人種・民族）が長期間にわたって本地区に居住していたと考えた（鳥居；1925年）。金関丈夫・国分直一によると、鳥居の発掘調査を実施した遺跡は円山貝塚ではなく、剣潭貝塚であるとしている（金関・国分；1950年）。国分直一は台湾全島の貝塚をまとめ、北部台湾（特に北盆地内）の貝塚の中で、定着性の見られる貝塚は円山貝塚だけであると考えた（国分；1962年）。金子寿衛男は貝塚から特徴的に出土する土器類を指標として時代区分を試みている（金子；1978年）。

日本の敗戦によって台湾が中華民国として独立してからの、台湾の考古学研究の進展には眼を見張るものがある。戦後の台湾人研究者によって実施された円山貝塚の調査（石；1954年a. b, 張；1954年d）の中で最も重要な発見は、円山貝塚の下層に貝層を伴わない縄文陶文化が発

見されたことである（張；1954年d）。後になってこの縄文陶文化は大坌坑遺跡の発掘調査によって、台湾における最も古い土器文化であることが理解され、大坌坑文化の名称で呼ばれることになった（劉；1963年, Chang；1969年）。宋文薫は台湾大学に収蔵されている円山貝塚から出土している石器の集成と分類を行い、数多くの資料を発表した（宋；1954年, 1955年a. b）。これによって円山貝塚から出土する石器の種類が極めて豊富であることと、石器製作の技術が極めて進歩していたことが明確に示された。連照美は円山文化にはこれらの石器製作の技術と並行して玉器の製作も同様に極めて重要な問題であるとした（連；1986年）。また、宋文薫と張光直は円山貝塚から出土した貝と大坌坑遺跡から出土した木炭を利用して、放射性炭素年代測定を行い、日本の統治時代からの問題であった円山貝塚の年代に関して一応の終止符をうった（宋・張；1964年, 1966年）。

連照美は円山貝塚の持つ学史的な背景・位置付けを行うと供に、円山貝塚の現状確認調査を行い、円山貝塚の保存の必要性を訴えた（連；1986年）。

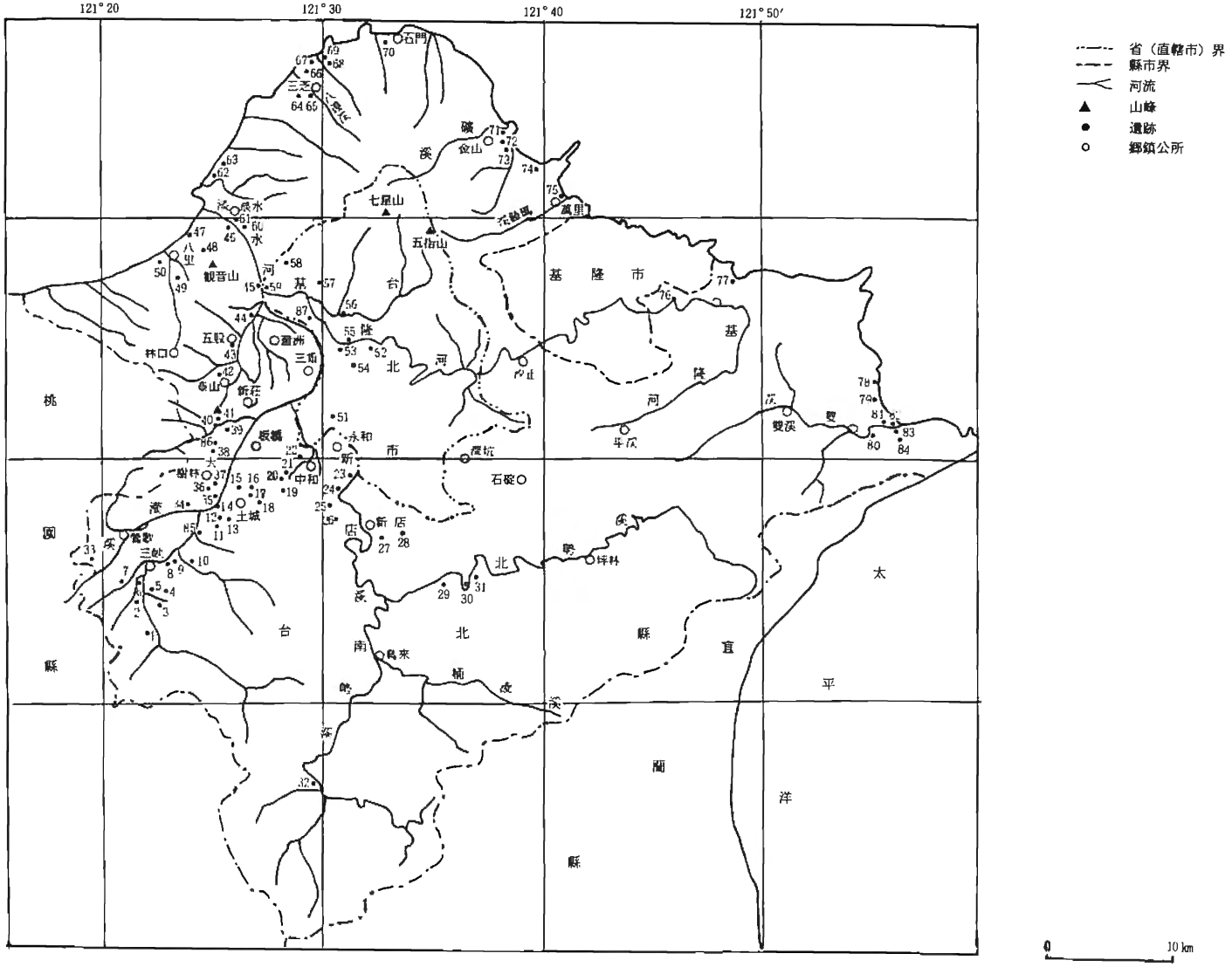
剣潭貝塚に関しては鳥居龍蔵（鳥居；1897年b）と佐藤伝蔵（佐藤；1901年）の報告された後しばらくの間存在する場所が不明になっていたが、1938年から開始された台湾神社の新たな造営に伴って剣潭山が削平されたことによって再び露出し、A～C地点の貝層の分布地点を確認することができた（金子；1978年）。宮丿下貝塚は同様に台湾神社の新たな造営に関連して1939年に確認され、丹桂之助・黒田徳米・宮本延人によって調査・報告されている（丹・黒田・宮本；1939年）。日本の統治時代には剣潭貝塚と宮丿下貝塚は別の貝塚として理解されていたが、現在は宮下貝塚として同一の貝塚として把握する場合と（黄・劉；1980年）、全く別の貝塚として把握する場合がある（連；1986年）。

西新庄子貝塚に関しては1934年に早坂一郎・林朝棨によって発見され、報告されている（早坂・林；1934年）。報告によると西新庄子貝塚は貝層が厚く、最も厚い部分は2ｍに達し、極めて規模の大きな貝塚であったことが理解できる。金子寿衛男は本貝塚から特徴的に出土する土器類を指標として時代区分を試みている（金子；1978年）。戦後になって、改めて宋文薫によって調査が実施されており（宋；1968-69年）、本貝塚の持つ重要性は改めて明確になった。

社子貝塚は平山勲が存在を確認し、西岡英夫が報告している（西岡；1933年）。その後、金関丈夫・国分直一は社子貝塚の系統についてふれ、鉄器が貝層中から出土していることを根拠として、社子貝塚の年代を鉄材が容易に供給されるようになった歴史時代始めの貝塚であろうと考えた（金関・国分；1954年）。

西雲岩貝塚（＝青雲岩貝塚）は1938年に台北帝大史学科内の台湾資料室の調査員によって発見され、宮本延人が調査しており、極めて小規模な貝塚であったことを報告している（宮本；1939年b）。連照美は慈法宮遺跡として遺跡名を改めており（連；1978年）、黄士強と劉益昌は西雲岩貝塚と慈法宮遺跡と両者の名称を使用し、別の遺跡として把握している（黄・劉；

第１図　台北市、台北縣、基隆市の遺跡分布図



1	圳頭	2	大埔山	3	菁學埔	4	土地公埔	5	犂舌尾
6	麻園山	7	下茅埔	8	上帝公山	9	鵠尾山	10	柴埔山
11	虎子山，土城	12	打鐵坑山	13	石壁寮	14	土地公山	15	斬龍山
16	溪子邊	17	螃蟹殼山	18	茅埔頭	19	平頂山	20	層樓閣山
21	生教所後	22	圓山子	23	尖山	24	外挖子山	25	豬肚山
26	車子路	27	七張	28	寶斗厝	29	火燒樟	30	苗圃 I
31	乾溝 I	32	林望眼	33	橋子頭	34	山子腳	35	狗蹄山
36	坡內坑	37	潭底	38	三角埔	39	營盤口	40	十八份
41	貴子坑	42	半山子	43	石土地公	44	慈法宮	45	龍形
46	渡船頭	47	十三行	48	大坌坑	49	長道坑口	50	下罟大埔
51	植物園	52	西新莊子	53	圓山	54	延吉街	55	劍潭
56	芝山巖	57	唭里岸	58	嗄嘮別山	59	關渡	60	竿蓁林
61	淡水測候所	62	港子平	63	崁頂	64	四棧橋	65	山豬崛
66	古莊，三芝	67	番社後	68	民主公廟 I	69	民主公廟 II	70	老崩山
71	金山	72	龜子山	73	萬里加投	74	國姓埔	75	萬里
76	楓子瀨	77	深澳	78	仁里	79	鹽寮，貢寮	80	慈仁宮
81	十三姓	82	舊社	83	福隆	84	虎子山，貢寮	85	媽祖田山
86	頂埤角	87	社子						

台北市，台北縣，基隆市史前遺址地名

1980年）。

太加納堡貝塚は佐藤伝蔵によってタカラッポ貝塚の名称で報告されているが（佐藤；1901年）、発見そのものはそれ以前であった（伊能；1897年・田代；1900年）。金子寿衛男は本貝塚から出土したとされる遺物を観察し、西新庄子貝塚と社子貝塚と同系統の貝塚であろうとした（金子；1978年）。

唄里岸貝塚に関しては国分直一による報告（国分；1962年）と、金子寿衛男による報告（金子；1978年）以外に資料を見ていないために明確ではないが、極めて規模の小さい貝塚であることが理解されている。

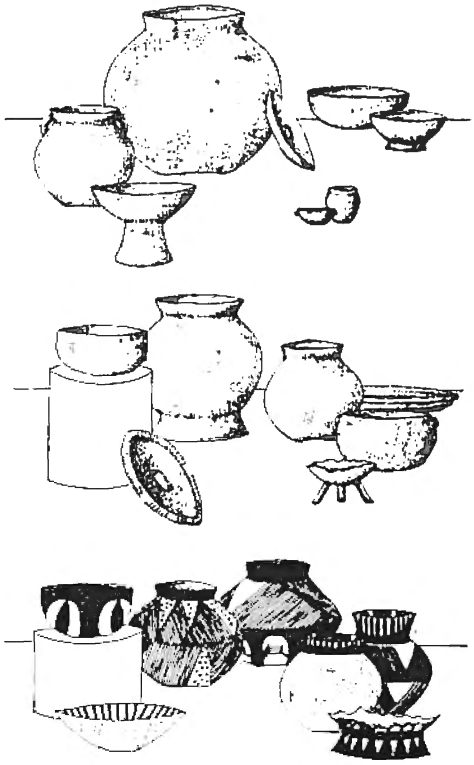
関渡貝塚に関しては金関丈夫・国分直一は江頭貝塚という名称で報告している（金関・国分；1954年，国分；1962年）。現在では関渡貝塚という名称が一般に使用されているために、本稿では関渡貝塚の名称を使用することとした。国分は本貝塚の中でA貝塚を社子貝塚と同系統の貝塚と考え、B貝塚を円山文化系の貝塚と考え、C貝塚からは近代中国陶片が出土しているとした（国分；1962年）。金子寿衛男は関渡貝塚という名称と関渡遺跡という名称で二ヶ所の遺跡を報告しているが、関渡貝塚は現在の関渡貝塚と同一の遺跡であろうと理解されるが、関渡遺跡が現在のどの遺跡にあたるのかは特定できていない。日本の統治から台湾が開放された後に、盛清沂によって調査が行われている（盛；1960年）。残念ながら筆者は報文には接しておらず、詳細に関しては理解していない。

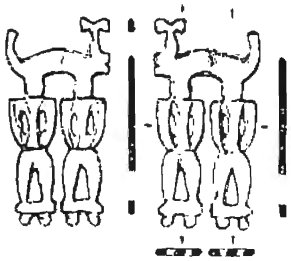
北部台湾の遺跡を考える上で重要な遺跡に芝山巌遺跡がある。芝山巌遺跡は古くから注目されてきた遺跡であり、金関丈夫・国分直一は1948年に踏査を行い、芝山巌遺跡と円山貝塚の相違と関連に関して重要な指摘を行っている（金関・国分；1954年）。金子寿衛男は芝山巌遺跡には貝塚は伴っていないものの、円山文化期を推考する上で重要な時期区分の画期として芝山巌式遺跡の設定を行っている（金子；1978年）。芝山巌遺跡の調査は黄士強によって発掘調査が実施され、それまで理解されていなかった貝層を確認した他に多大の成果を上げている（黄；1984年）。この発掘調査によって確認された最も重要な事実は、コメが出土していることである。それまで円山文化期における農耕の存在は考えられていたが、現実にコメが出土したことによって稲作が行われていたことが事実として確認されることになった。残念ながらこの調査によって確認されたのは稲作が行われていたという事実の存在のみであり、耕作の技術的な側面の他、水稲であったのか陸稲であったのかという問題に関しては確認することはできなかった。黄はこの調査の報告の中で、始めて芝山巌文化という名称を用いて、円山文化との相違に関して意見を示している。また、この調査では後に、宋文薫・連照美によって卑南文化との関連が指摘される（宋・連；1984年）きっかけとなった人獣玉玦が出土したという意味からも極めて重要な調査であった。

北部台湾の考古学の研究を行う上で重要な発掘調査は日本の台湾統治が終焉し、台湾人の研

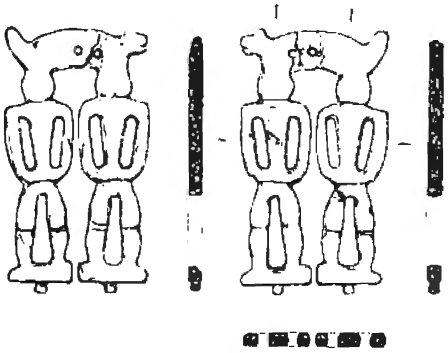
究者による調査が進行するに従って遺跡数は急激に増加した。特に盛清沂は多くの研究資料を整理し、台湾北部の80ヶ所以上の遺跡の中から65ヶ所の円山文化期に関連する遺跡の分布図を作成した（盛；1960年）。この後も盛は日本の統治時代に記録された遺跡の追跡調査を行うと同時に詳細な記録を収集し、北部台湾の遺跡の状況を明かにした。この結果、盛は日本の統治時代よりも遥かに数多くの遺跡の存在を明確にした（盛；1962年b，1962年c，1963年a，1964年）。盛の行ったこれらの調査は地域毎に行った詳細かつ綿密な調査であった。

この様な分布を中心とした調査の他に、極めて重要な調査が北部台湾では続々と実施された。特に重要な調査は宋文薫と石璋如の行った樹林にある狗蹄山遺跡の発掘調査（宋；1955年a，1956年）、劉斌雄・盛清沂・呉基瑞の行った大安寮にある土地公山遺跡の発掘調査（劉・盛・呉；1961年）、劉斌雄と楊君実が各々行った八里郷にある十三行遺跡の発掘調査（楊；1961年，劉；1963年）、劉斌雄と張光直が各々行った八里郷にある大坌坑遺跡の発掘調査（劉；1963年，Chang；1969年）等は特に重要な発掘調査である。これらの調査によって円山文化期を巡る北部台湾の状況は、かなり明確になってきた。特に大坌坑遺跡の調査の結果、張光直は大坌坑文化は狩猟・採集の他に根茎植物の栽培を行っていたと推測した（Chang；1970年）。





芝山岩遺跡出土装飾品



卑南遺跡出土装飾品

第２図　芝山岩遺跡出土土器・装飾品と卑南遺跡出土装飾品

金子寿衛男は1978年に台湾の貝塚と貝塚を構成する貝類についての論稿を発表している（金子；1978年）。同書は1978年に発表されたものであったが、執筆そのものは1944年に既に脱稿していた。当時の戦争・召集・敗戦・復員という激動の中で善意の人々に支えられ、台湾から金子の手元に戻り、発表されるに至った論文である。同書の中で、金子は台湾の全土にわたる貝塚の分布を各々の地域毎にまとめ、各々の貝塚について詳細な説明を行い、各々の貝塚を形成した文化の様相に至るまで論及している。特に北部地区の貝塚に関して、三時期に分けて把握することが可能であるとしている。円山貝塚・芝山巌貝塚・西新庄子貝塚に代表される遺跡から出土する遺物を時期区分の標識として、円山式期に伴う貝塚としては円山貝塚、剣潭貝塚A・B、宮下貝塚を示している。芝山巌式期に伴う貝塚としては西雲岩貝塚を示し、芝山巌遺跡そのものに貝塚は確認されていないとしている。西新庄子式期に伴う貝塚としては西新庄子貝塚、社子貝塚、太加納堡貝塚を示し、各々の時期の貝塚における貝塚の構成貝類の特徴と貝塚の立地に見られる特徴を示している。金子の試みたこの時期区分は執筆した当時としては特筆すべき指摘であったと言えるが、論文自体が数奇な運命によって発表が遅れたことは極めて残念であった。金子の試みた時期区分は、現在理解されている最も新しい台湾の文化編年（宋；1980年，黄・劉；1980年，黄；1984・1986年）に比較しても極めて先進的なものであった。

黄士強・劉益昌の実施した台湾全土における遺跡分布調査の報告の中で、各々の遺跡の現状と出土遺物などに関してまとめている（黄・劉；1980年）。黄・劉はこの中で北部台湾の166遺跡の存在を示すと同時に、遺跡の内容の記述の中で明確に貝塚と明示してある遺跡・貝塚であろうと表現されている遺跡の合計16遺跡を報告している。黄・劉はこの中で円山文化と植物園文化を独立した文化であると把握した。黄士強はその後に実施した芝山巌遺跡の調査、円山文化・芝山巌文化・植物園文化に細分して把握するようになった（黄；1984年）。黄は台湾の考古学上の各地方における各文化を説明し、円山文化・芝山巌文化・植物園文化の中で植物園文化は一時期古く位置付けられる円山文化よりも、その後に成立してくる十三行文化との関連の方が強いという見解を示した（黄；1986年）。

連照美は円山貝塚の現状確認を行った調査報告の中で、円山貝塚を始めとして北部台湾を中心とした考古学史を詳細に検証して、円山貝塚の考古学的な位置づけを行い、円山貝塚の重要性を指摘した（連；1986年）。この中で連は『貝塚』という名称を学史的に振り返り、その定義を検証し、貝塚研究の重要性を指摘すると同時に、『貝塚』を単純に「古人の食物の残骸が捨てられて堆積して成立したゴミ捨て場」とは絶対に認識してはならないとした。連は円山貝塚の重要性を訴えると同時に円山貝塚の現状保存を行うことを提唱している。現在円山貝塚は保存を前提とした協議が繰り返されていると聞いており、今後の進展によっては多くの重要な遺跡の保存にも多大の影響を与えるようになるものと期待されている。

ま と め

貝塚を考える場合、貝塚の定義を明確にしておくことが必要である。貝塚というものをどの様に定義づけるのかを明確にすることによって、今後の貝塚研究の方向性をある程度まで決定することになる。特に台湾における貝塚研究は台湾考古学の研究の出発段階から調査・研究の対象とされてきたものであり、鳥居龍蔵を始めとした多くの日本人研究者が強く関わってきた。従って、台湾における貝塚に対する認識は、日本におえる貝塚の認識と類似していることを指摘できる。貝塚をどの様に定義するかは、早急に行わなければならない重要な課題である。

貝塚という視点に立って台北盆地内の円山文化期を考える場合、大型貝塚と小型貝塚と貝塚を伴わない遺跡という比較で考える必要がある。北部台湾の貝塚は、大型貝塚と称しても日本の縄文期に見ることのできるような巨大な貝塚ではない。大型貝塚と小型貝塚の境界をどの様に考えるかは、常に問題となる部分である。純貝層の厚さ・面積・貝の絶対量などで貝塚の大小の境界を定義することは可能であろうが、絶対的な認識として境界を明確にできるものではない。貝塚の形成されるのに関わった期間や継続性などの多くの要素に加えて、貝塚を形成した人間集団等を総合的に判断して大型・小型の判断を行うべきである。本稿を著すにあたって最も困難な問題は、この大型と小型の境界をどの様に考えるかと言うことであった。基本的にこの問題に関する解答は、現在に至るまで全く得ていない。本稿ではその部分を曖昧にしたまま論を進めることになってしまったが、基本的にはどちらかと言えば北部台湾で相対的に規模の大きな貝塚に属すると考えられる貝塚を大型貝塚と仮定し、それ以外の貝塚を総て小型貝塚とした。大型・小型という貝塚の認識を明確にするということは貝塚を考える上で極めて重要な問題であり、当時の社会構造などとも深く関わっていることが考えられ、解決されなければならない大きな問題である。今後の調査・研究の中で大型・小型の考え方を明確にして行きたい。

貝塚と貝塚を形成した集落との関係に関して、あるいはそれぞれの遺跡から出土してくる個々の遺物の細部にわたる比較検討が必要である。残念ながら台湾では貝塚の発掘調査の類例が少なく、貝塚を形成した集落の発掘調査は全く行われていない。貝塚と貝塚を形成しない遺跡から出土してくる遺物を比較するにしても、個々の遺物の比較を行うことは可能であるが、資料数の不足から量的な比較・検討を行うことはできない。従って、今回は北部台湾における遺跡の分布を中心資料として進めていきたい。

北部台湾で確認されている円山文化期の遺跡の中における、それぞれの遺跡の数だけを純粋に比較してみたい。円山貝塚を代表とする円山文化は、円山貝塚があまりにも有名であり、日本では大型の貝塚に代表される貝塚文化であると誤解されている。筆者が理解している限りでは、円山文化期に属すると考えられる貝塚を伴う遺跡は台北盆地内だけで確認されており、立地する場所が限定された狭小な範囲だけで確認されている特殊な存在である。これは円山文化

期における貝塚そのものの特殊性を端的に示していることである。円山文化期の遺跡の中で、大型貝塚を伴う遺跡は円山貝塚と西新庄子貝塚だけであり、極めて特殊な例である。その他の淇里岸貝塚・西雲岩貝塚等の小型貝塚を伴う遺跡も数の上で比較する限り特殊な遺跡であると言うことを指摘することができる。同様に台北盆地内においても、円山文化期の中で普遍的に見ることのできる遺跡は、貝塚を伴わない遺跡である事が理解できる。

台北盆地内に分布する貝塚は、盆地の北側部分に集中して貝塚が確認される。特に現在の淡水河が北上する盆地からの出口周辺に立地している貝塚が多い。この様な貝塚の分布に見られる偏在性には、特に貝塚を形成するのに主体となった貝（＝オオシジミ）の棲息域が大きく影響を与えているものと考えられる。一方、円山文化期に見られる貝塚の特殊性・分布に見られる極端な偏在性が単純に貝塚を構成する貝の主要な棲息域のみに限定されていたと考えるには問題が残る。貝塚の場所を決定するのに貝の棲息域が影響を与えたことは大きな要因の一つであるが、それが総てであるとは考えられない。貝塚を形成した集落の生業が貝、特にオオシジミを採捕することに限定されていたと考えることはできない。オオシジミの採捕は、生業の中の一つであったと考えるのが適当である。

オオシジミの貝殻が貝製品の製作に適しているか否かは別として、オオシジミなどの貝殻を利用した貝製品の出土が見られないことから考えて、食料としてオオシジミを採捕した結果貝塚が形成された可能性が高い。しかし、台湾ではビンローを噛む風習があり、貝塚の形成された時代にはどうであったのかを考えることが必要である。ビンローは石灰を混ぜて咀嚼するものであり、その石灰を取るために貝殻を焼いて利用することは比較的知られていることである。ビンローを噛んでいたか否かは、今後の重要な課題の一つである。

貝塚が形成されていた当時の人口数とも関連する問題であるが、採捕された貝がその貝塚だけで消費されたのだろうか。特に円山貝塚を例に考えた場合、日常の食料としての消費活動の結果として円山貝塚が形成されたと考えるには大きな躊躇を感じる。円山貝塚で採捕された貝は、円山貝塚を形成した集落だけで消費されたものであろうか。貝塚に伴う集落の調査が実施されていない現在、集落と貝塚の関連に関しては、今後の調査の重要な課題である。

台北盆地内で確認されている貝塚を構成している貝種が偏在していることは、常に指摘されている重要な問題である（金子；1978年）。北部台湾、特に台北盆地内に分布する貝塚の場合汽水産の貝類によって構成されており、旧台北鹹水湖の沿岸に存在していた貝塚であることが考えられる。貝塚を構成する主要な貝であるオオシジミの棲息域は現生種との比較で、かなり偏在することが指摘されている（金子；1978年）。現在と円山文化期における自然環境は大きく変化しており、オオシジミの棲息域が現在と全く同じであったとは考えられない。一方、貝を採捕し貝肉を貝殻から取り出した場所の近くに貝塚が形成されたと考えると、貝の棲息域と貝塚の形成された場所が大きく相違しているとは考えられない。従って貝塚の形成された場所

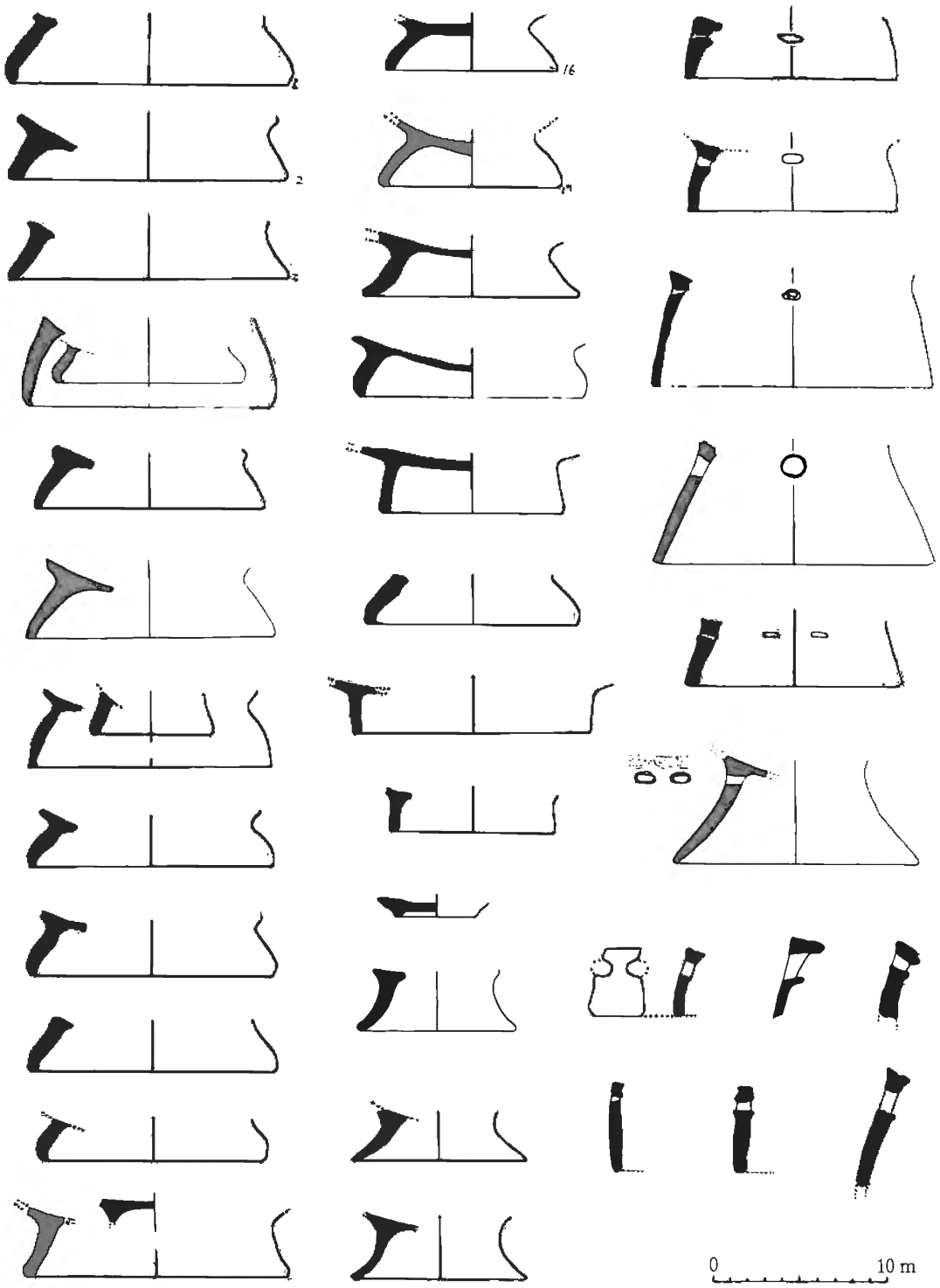
の近くの水域が貝の棲息域と考えた場合、貝塚の大小は周辺水域に棲息する貝の棲息数量に起因していたと考えることができる。従って大型貝塚と小型貝塚と貝塚を伴わない遺跡は、棲息する貝の絶対量の豊富さが強く関わっていたと考えられる。貝塚の立地する周辺水域に棲息する貝の絶対量が貝塚の大小に強く関わったことは充分に考えられる問題であるが、それだけによって決定されていたと考えることはできない。一方、貝塚の貝種が偏在するという問題に関して考えてみても、自然環境にによる影響だけを考えることはできない。自然環境が強く影響を与えていることは当然の問題であるが、それだけによって貝種が決定されたと考えることは問題が残る。今後の研究の中で解決しなければならない問題である。

また、円山文化期の貝塚は貝種がオオシジミに偏在しているものの、旧台北鹹水湖には棲息していなかった貝種が出土していることが知られている（金子；1978年）。これらの貝がどの様な経路を経て、台北盆地内の貝塚にもたらされたかを考える必要がある。台北盆地内の貝塚の住民が直接それらの貝の棲息域に出向いて採補したものであるのか、何等かの交易の結果台北盆地内にもたらされたものであるのか等は重要な問題を含んでいる。直接出向いて採捕したものであれば少なくともそれらの貝の棲息域は円山文化期の文化の影響範囲内であったことが考えられる。一方、何等かの交易によってもたらされたものであればどの様な形で、どの様な相手との交易であったのかを、考える必要がある。今後の重要な課題である。

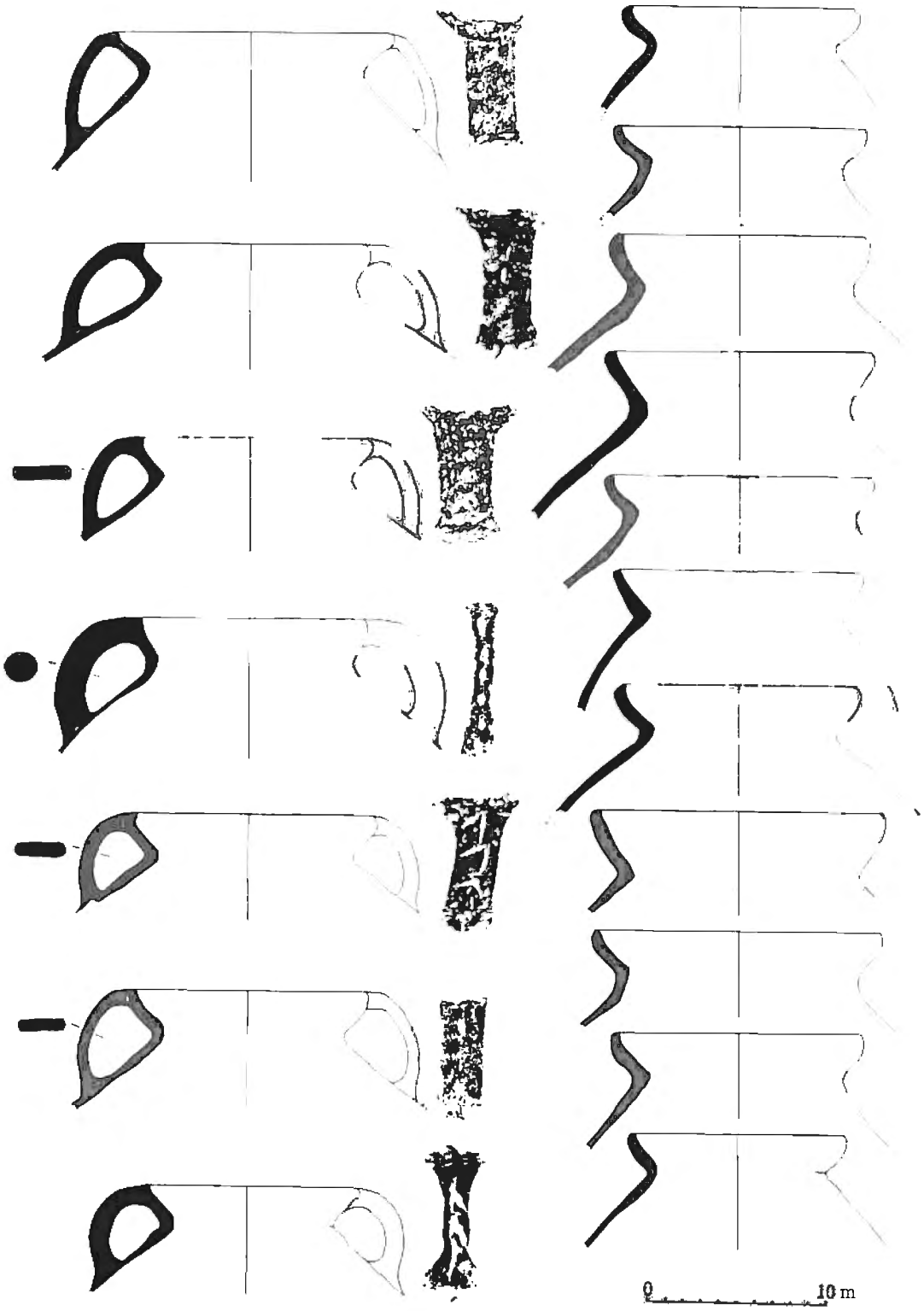
旧台北鹹水湖に棲息していなかった貝が出土する一方、棲息していたのに関わらず、全く採捕されていない貝種が存在している。これに関しては、好みの問題、技術的な問題等を考えることができる。金子寿衛男はシジミ類・イシガイ類・ドブガイ類ドブガイモドキ等の泥中に埋没して棲息する純淡水産の種は、当時の人間の手が淡水産二枚貝へ及ばなかったとしている（金子；1978年）。

金子寿衛男は円山文化期の円山式期・芝山巌式期・西新庄子式期の各々の大別された貝塚の立地上の特徴と、変遷について論及している（金子；1978年）。円山式期・芝山巌式期に伴う貝塚は盆地周縁の斜面に位置しており、西新庄子式期は盆地面に立地しているとしている。これらの立場上の特徴は時代的変化、特に旧台北鹹水湖の新旧時期的な変化の結果現れた現象として把握できると考える。今後、自然地理的な側面から旧台北鹹水湖の成立から消滅までの詳細なプロセスが理解される必要がある。この旧台北鹹水湖の変化は単に貝塚の成立から消滅という現象面を現すばかりではなく、生産手段としての貝の捕獲に代表される漁労そのものの消長を示しているものであり、漁労に変わる何等かの生産手段の質的・量的な変化を促す遠因となったと考える。

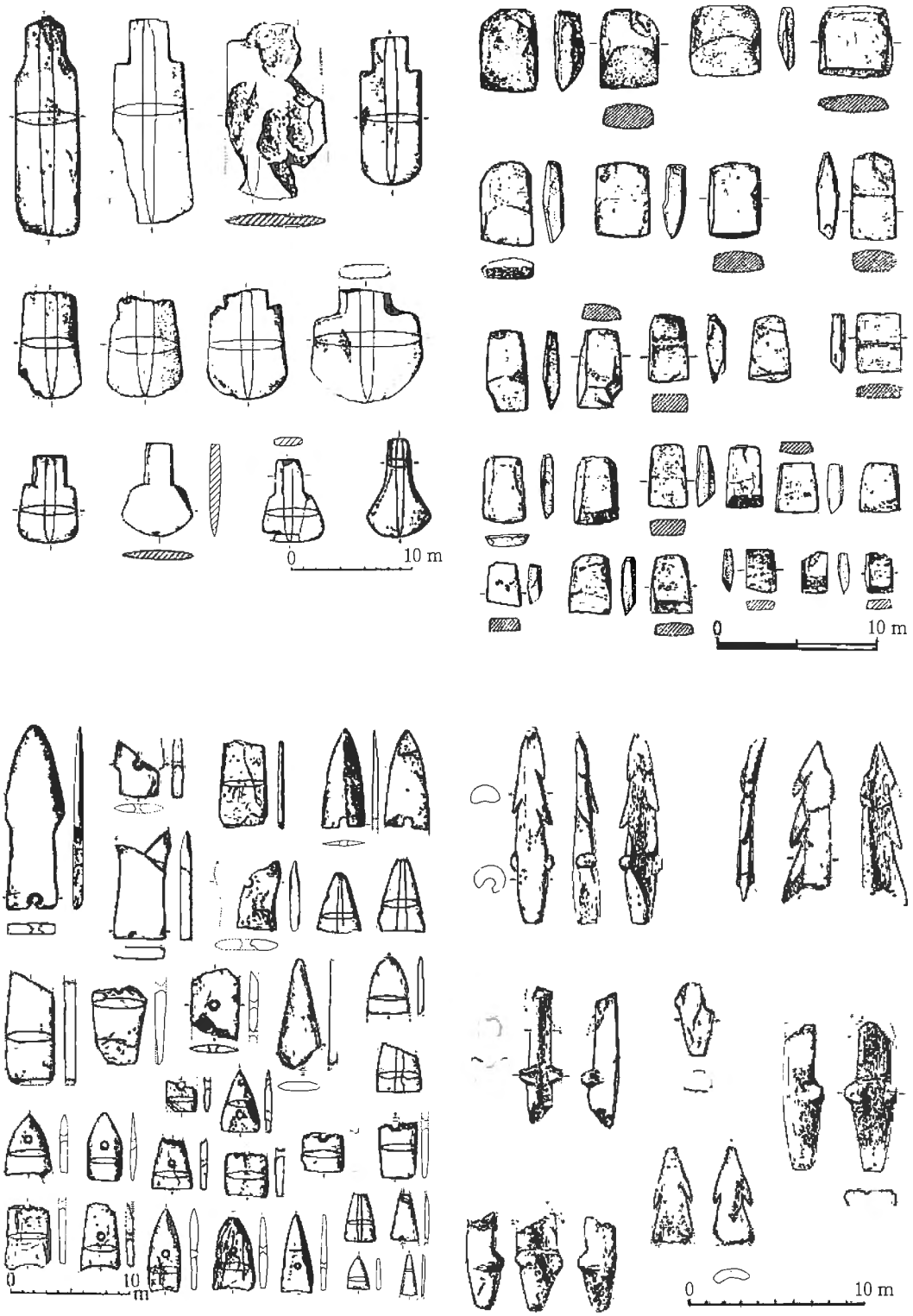
金子の指摘した貝塚の変遷は、円山貝塚に代表される円山式期の貝塚の後に、芝山巌式期のが続き、西新庄子式期のが台北盆地内を巡る貝塚として存在している。円山式期・西新庄子式期では比較的規模の大きな貝塚が形成され、それとは別に小型の貝塚の存在が確認されている。



第３図　円山文化遺物（土器１）



第４図　円山文化遺物（土器２）

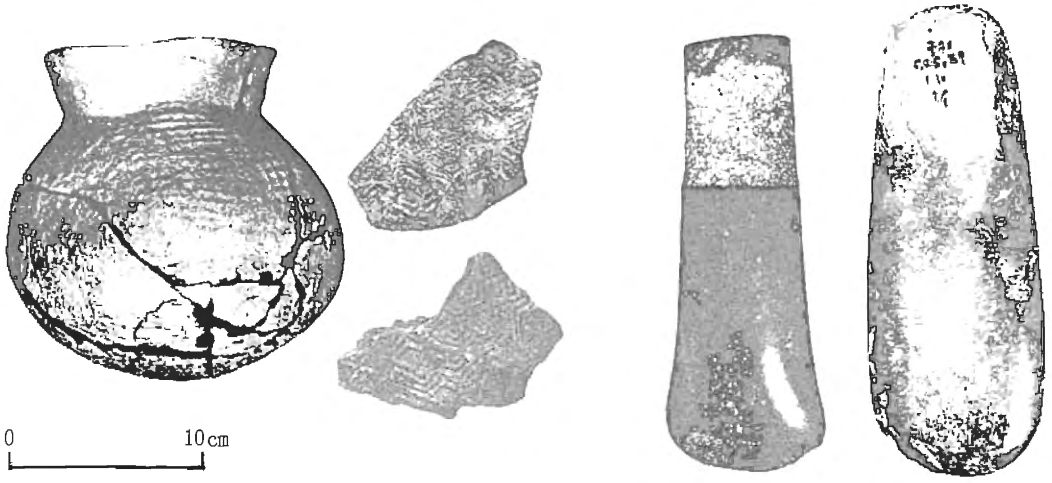


第５図　円山文化遺物（石器・骨角器）

一方、芝山巌式期では大型の貝塚が確認されておらず、小型の貝塚の存在もかなり数が減少していることが理解されている。

円山式期で貝の採捕が盛んに行われ、芝山巌式期では減少し、西新庄子式では再び増加するような状況を示している。そのような状況が事実であったと仮定した場合、そのような状況に至った原因は単純に自然環境の変化とだけ捉えて良いのかは疑問である。台北鹹水湖を巡る環境変化に加えて、貝の乱獲などによる生態系の変化や、生業形態の変化なども考慮しておくことが必要であろう。

国分直一は台北盆地内の貝塚の中で定着性を見ることができるのは円山貝塚だけであるとしている（国分；1962年）。詳細な根拠は示されていないが国分が貝塚の規模の大小のみから定着性を論じていることは考えられない。国分の考えた貝塚における定着性とは何を意味しているのかについて考えてみたい。円山文化では既に農耕が行われていたと考えられ（宋；1962年)、円山文化に属する多くの遺跡は強い定着性を前提として成立していると考えられる。国分の指摘した円山貝塚の定着性を解釈する場合、定着性という言葉を継続性という言葉に置き換えてみると理解が容易になると考える。つまり、円山貝塚には貝の採捕に継続性が見られるということであり、他の貝塚には見られないということである。円山貝塚に継続性が認められるということは、継続することを必要とした社会構造の存在が考えられ、その存在の前提として国分は定着性という言葉を使用したものと考える。最も考えられる社会構造としては農耕と貝の採捕との間に分業が存在していたということである。しかし、これは円山貝塚から豊富に出土している各種の石器の存在（宋；1954年，1955年a，b）から、円山貝塚の住民が必ずしも貝の採捕の専業集団と考えることはできず、円山貝塚の住民によってほぼ独占的に貝の採捕が行われていたが、その在り方は農耕対漁労（貝の採捕）という対比で把握するには問題が残る。一方、



第６図　植物園文化遺物

円山貝塚以外の貝塚には継続性は見られないということであるが、回帰性はどうであったのかという問題が残る。規則的、小規模的な周期によって回帰して形成された貝塚は存在していないのであろうか。今後の調査の中で明確になることが期待される。

今後、大型貝塚・小型貝塚の定義を明確にした上で、貝塚の継続性・回帰性の問題を考慮して比較することにより、大型貝塚・小型貝塚の性格が理解されてくるようになることが期待される。

台湾の考古学上の各文化は各々が強く独立した文化圏を持つと同時に、周囲の文化とは隔絶した関係にあったと考える傾向があった。関係が隔絶していたとは考えないまでも、どの様な関係にあったかを理解できるような資料は確認されておらず、全く不明であった。特に、各々の文化が特徴的に持つ石器などが相違し、遺物の組成などが極端に異なっており、相互の文化の関連を示すような遺物は確認されていなかった。近年、円山文化と東海岸の卑南文化の間に何等かの関連があったことが、宋文薫と連照美によって明確にされた（宋・連；1984年）。これによって円山文化期における貝塚の存在を考える前提として、卑南文化との関連を充分に理解する必要が生じた。芝山巌遺跡から出土した人獣形玉玦は円山文化と卑南文化の双方から出土している。これらの極めて特殊な形態をした装飾品が同時期に複数の地域で発生すると考えるのは不自然である。円山文化・卑南文化のいずれかの文化で作成されたものが、何等かの交易によってもたらされたと考えるのが最も自然である。

仮に円山文化と卑南文化の間に交易が存在していた場合、どの様な類型の交易によって関連が存在していたのかという問題がある。台湾における交易の類型を考える上で、事前に出草（＝首狩）を考慮しなければならない。円山文化・卑南文化では出草が行われていたことが考えられており（黄；1986年）、そのような周囲との関係が存在している中でどの様な手段によって交易が行われていたのかを考えることは重要である。各々の文化で行われていたと考えられる出草をどの様に理解するかは重要な問題である。出草が実施される目的と原因を考古学上の遺跡・遺構・遺物等から理解することは極めて困難である。高砂族における出草を参考にしたい。

高砂族に見られる出草の目的は成人になるための行為として、争議の黒白を決するため、近親者の復習のため、嫌疑・冤罪を晴らすため、嫁取りの競争に勝つため、悪疫の流行を除くため、凶兆の有るときに不吉を未然に防ぐため、自己の武勇を誇るために行われることが多い。

この様なことから出草という行為は、無闇に行われていたのではなく、一定の価値観を前提として実施されていた。従って、常に出草が実施されていたのではなく、出草を行う必要が生じたときに実施され、それ以外のときは常に敵対関係にあったと考える必要は無い。常に敵対関係にある部落というものの存在を全く否定することはできない。同様に民族間による敵対関係が全く存在しないと言うことはできない。この様な複雑な出草という行為をどの様に解釈す

るかは、極めて難しい問題である。必ずしも交易といえるものではないが、交易の類型を考える場合に、出草による強奪の結果として種々の物品が広がる可能性も存在している。出草では出草した家の財産を奪い取る例が存在していることも理解されている。

北部台湾の円山文化期の貝塚に関してまとめるつもりで論を進めていく過程で、全体としてまとまりに欠けるものとなってしまった。台湾の初期の考古学研究は北部台湾の貝塚、特に円山貝塚を巡って展開され、その後台湾各地、特に南部台湾で貝塚が多く発見され、調査されてきた。日本の敗戦によって台湾統治が終結した後は、多くの台湾人研究者の努力によって台湾考古学が飛躍的に発展し、その過程で貝塚研究は大きな役割を果たした。台湾考古学における貝塚研究の今後の展望を考えてみると、第一に貝塚と集落の関係を明確にする必要がある。第二は貝塚の性格を明確にする必要がある。第三は貝塚の分布に見られる偏在性を理解することである。第四は貝塚とコメの栽培との関連に関して理解することである。以上の四点の他にも大型貝塚と小型貝塚と貝塚を有さない遺跡との関係などの、貝塚研究には多くの解決されなければならない諸問題が山積している。

（東南アジア考古学会員）

文　献

伊能嘉矩　1897年　『台湾に於ける石器時代遺跡の発見』（台湾通信第16会）「東京人類学会雑誌」12-134

鳥居龍蔵　1897年a『円山貝塚に関する通信』「東京人類学会雑誌」13-141

鳥居龍蔵　1897年b『台湾に於ける有史以前の遺跡』「地学雑誌」9-107

田代安定　1900年　『台湾に於ける石器の発見』（書簡）「東京人類学会雑誌」16-177

佐藤伝蔵　1901年　『台湾台北附近の石器時代遺跡』「東京人類学会雑誌」16-179

鳥居龍蔵　1911年　『台湾台北円山貝塚』「人類学会雑誌」27-1

宮原　敦　1919年　『台湾台北円山に於ける巨大な砥石並に貝塚について』「人類学会雑誌」34-4

鳥居龍蔵　1925年　『台湾の有史以前』「有史以前の日本」

西岡英夫　1933年　『浮洲部落社子』「台湾時報」1933年11月号

丹桂之助　1934年　『Corbicula maxima PRIME の現生標本と貝塚標本とにあらわれる変異について』「ヴィーナス」4-5

早坂一郎・林　朝棨　1934年　『台北市西新庄子貝塚の貝類』「台湾地学記事」5-9,10

平山　勲　1935年　『台湾考古学の現状－北部台湾に関して－』「台湾社会経済史全集」9

丹桂之助・黒田徳米・宮本延人　1939年　『台北郊外宮丿下貝塚』「科学の台湾」7-2

宮本延人　1939年a『台湾先史時代概説』「人類学先史学講座」10

宮本延人　1939年b『台北州西雲岩石器時代遺跡調査予報』「南方土俗」5-3,4

山中　樵・西川　満　1940年　『亨和三年癸亥　漂流台湾チョプラン嶋之記』「愛書」 12
台湾総督府図書館内台湾愛書会
鹿野忠雄　1943年　『台湾先史時代の文化層』「学海」 1-3
金関丈夫・国分直一　1950年　『台湾考古学研究簡史』「台湾文化」 6-1
金関丈夫・国分直一　1954年　『台湾先史考古学における近年の工作』「民俗学研究」18-1,2
宋　文薫　1954年　『本系旧蔵円山石器（一）』「考古人類学刊」 4
宋　文薫　1955年a『本系旧蔵円山石器（二）』「考古人類学刊」 5
宋　文薫　1955年b『本系旧蔵円山石器（三）』「考古人類学刊」 6
宋　文薫　1955年c『樹林狗蹄山史前遺址発掘』「考古人類学刊」 5
盛　清沂　1960年　『史前志』「台北県志」 4
楊　君実　1961年　『台北県八里郷十三行及大坌坑両史前遺址発掘報告』「考古人類学刊」
17-18
劉　斌雄・盛　清沂・呉　基瑞　1961年　『台北県大安寮土地公山遺址発掘報告』 台北県文
献委員会
盛　清沂　1962年a『台北県関渡遺址調査記』「台湾文献」 12-1
盛　清沂　1962年b『台湾省北海岸史前遺址調査報告』「台湾文献」 13-3
盛　清沂　1962年c『淡水河上游史前遺址調査報告』「台湾文献」 13-4
国分直一　1962年　『台湾先史時代の貝塚』「農林省水産講習所研究報告」 人文科学篇　7
劉　斌雄　1963年　『台北八里坌史前遺址の発掘』「台湾文献」 3
盛　清沂　1963年a『宣蘭平原辺縁史前遺址調査報告』「台湾文献」 14-1
盛　清沂　1963年b『桃園沿海台地地区史前遺址調査報告』「台湾文献」 14-2
盛　清沂　1964年　『新竹地区史前遺址調査報告』「台湾文献」 15-4
宋　文薫　1968-1969年　『台北市西新庄子貝塚発掘報告』 国家科学委員会年報57-58年
Chang.K.C（張　光直）1969年　Fengpitou. Tapenkeng. and the Prehistory of Taiwan. New
Haven Yale University Publications in Anthropology.　No. 73
Chang.K.C（張　光直）1970年　The Beginnings of Agriculture in the Far East. Antiquity.　4
連　照美　1978年　『新近発言的台北県慈法宮遺址』 国家科学委員会年報66-67年
金子寿衛男　1978年　『台湾に於ける貝塚の分布と其の構成貝類について』「大阪府立岡高等
学校紀要」 2
宋　文薫　1980年　『由考古学看台湾』「中国的台湾」 中央文物供応社
黄　士強・劉　益昌　1980年　『全省重要史跡勘察興整修建議 －考古遺址興旧社部分－』 国
立台湾大学人類学系
黄　士強　1984年　『芝山巌遺址発掘報告』 台北市文献委員会

宋　文薫・連　照美　1984年　『台湾史前時代入獣形玉玦耳飾』「国立台湾大学考古人類学刊」44
黄　士強　1986年　『台湾史前文化簡介』台湾省立博物館
連　照美　1986年　『台北円山遺址現況調査報告』国立台湾大学文学院人類学系

本文は平成3年度千葉市立加曽利貝塚博物館考古学講座の講演内容をまとめていただいたものです。（編集者）